今回の調査結果から分かること

汐見稔幸（白梅学園大学　学長）

今回の結果はやや複雑な日本の父親の置かれた位置と意識を表出したように思います。5 年前同様「日本のお父さん、あなたはかわいそう」という気持ちにもなる結果なのですが、それだけでなく、みずからの生き方の方向性を模索しつつ、しかし自信がなかなかもてないでいる現代の父親の静かな葛藤のイメージが浮かんでくる結果でした。

「家事や育児に今以上にかかわりたい」という父親が 6 割近くになりましたが、この中には①現状でも育児をかなりやっているが、やればやるほど子どもと一緒にいたいという気持ちが強くなるので、もっとかかわりたい！という積極派の人と②子どもと実際にはかかわれないでいるが、やはりもっと子どもにかかわるべきだと思う、という反省派の人が含まれるでしょう。いずれにしても、現状の家族役割に満足していない父親は日本ではかなり多く、それを改善したいと思っている父親が 6 割近くいるということはしっかり確認しておきたいと思います。裏を返すと、日本の父親は、家庭人としての役割を変えたいと思っている割合が次第に高くなっているということであり、家庭人としての生き方を模索している父親が多いことを示唆しているのだと思います。

しかし、このことと「子どもとの接し方に自信がもてない」という父親が 4 割近くにまで増えたということとの関係はどう考えたらいいのでしょうか。家事・育児をもっとやりたいと思っているのだが、育児をしようにも、かかわり方に自信がない、という父親が増えているのです。

私は、今回の調査で出たこの項目の結果が、今後の父親調査のヒントを与えてくれているように思います。

「子どもとの接し方に自信がもてない」ということにはいくつかの側面があります。まず文字通り、接し方のノウハウがわからないという可能性があります。親は、子どもと接するとき、教育的にかかわる（何かを教えてやらねば、やりたいという姿勢でかかわる）場合と、遊び的にかかわる（一緒に遊びを楽しむ、子どもといること自体を楽しむ）場合が大別されますが、教育的にかかわる場合は、この子の将来に今はこれが一番大事というようなことが親の方にある程度しっかりと自覚されていなければなりません。しかし、これが今日難しいのです。社会の変動が早すぎて、自分が子どもの頃大事にしてきたことをわが子にも繰り返せばいいという時代でない。でも、では何をこそ、どう伝えればいいのだ、ということはなかなかいえない。それが自信のなさにつながっているわけです。

遊び的にかかわる場合、別の困難が出てきます。今回アンケートに答えてくださった父親世代の多くは、幼い頃は自分の父親がバブル期で必死で働いていて父親に遊んでもらったという経験がとても少ないのです。しかも自らは、外で群れて遊んだという経験があまりないという初めての世代で、遊びというとゲーム以外はあまり豊かな経験がない人も多い。そのため、子どもと無邪気

に遊ぶという身体が育っていない父親が多くなってきていて、幼い子と接しても、自然な関係で遊ぶことが苦手になっているわけです。だから「接し方」に自信がもてないというのだと思います。

「子どもとの接し方に自信がもてない」のは、さらに、子どもたちが生きることになる将来についての明確なビジョンが描けない父親自身の自信のなさということも重なっているように思います。これは現代人共通の心性だと思いますが、心の深いところで不安を強く抱くようになっていて、何をしても確信になりにくいという時代になっています。勤めているところが業績を回復してきていても、それがずっと続くわけではないということがわかっていますから、この不安はしばらく続くと思います。でも、そういう中で、確実に父親の育児・家事参加は広がっていて、この問題を次の次元にアップして、父親の育児や家事参加という窓枠から、家族、世間、世界、そして自分というものを、自分の目と感性によって見直すということが始まってもいいと思います。父親調査が、社会の地域的なあり方を別の面から光を当ててくれるようになる時代なのです。

福丸由佳（白梅学園大学　教授）

ワークライフバランスというワードはかなり浸透してきた昨今ですが、父親の子育て取り巻く現実は、まだまだ思うようにいかない面が多いようです。「週末はまだいいけど、平日の家事・育児との両立はなかなか・・・」2005 年の調査から9年たった今回も、頑張るお父さんたちからそんな声がきこえてきそうです。

子どもの接し方に自信がもてない父親が増えているという結果は、社会が作り出す理想的なイクメンイメージの一方で、等身大の父親モデルがいなかったり、自分なりの頑張りを自他共に認める雰囲気があまりなかったりすることも、その背景にあるかもしれません。そういう意味でも、子どもとのかかわりだけでなく、妻とのコミュニケーションは十分だろうかということも気になります。夫婦間の意見の違い、経験や状況の違いなどもお互いに認めつつ、自分の気持ちを伝えたり、相手に関心を持って耳を傾けたり、また、ささやかな労いや思いやりの言葉を口にしてみたり。夫婦の何気ないコミュニケーションの積み重ねがいっそう大切な時期といえるでしょう。

もっとかかわりたいけれど、２１時以降に帰宅する父親が4割という状況。父親の努力だけに負わせないことは、社会全体の責任であると改めて強く感じました。と同時に、今こうしてやりくりを頑張っているお父さんたちの経験は、次の子育て世代を支えるときにも、きっと活きてくると思います。かなり気が早い話ですが・・・長い人生の一時期である子育ての時間をお互いに見守りあえること。そんなあたたかな循環がうまれる社会にしていきたいですね。